

鈴木 敦子 白木 佐知 中野 聖子 篠原 妃羽 福田ひろみ

徳島赤十字病院 6階南病棟

要 旨

本研究の目的は臨床看護師の直観育成に関する示唆を得るためにA病院の臨床看護師468名を対象に川原らが改良した「臨床看護婦の本質的直観能力」を用いて臨床看護師の直観と教育，看護実践の主体性，経験年数との関連性を検討することである。調査を行い以下の結果を得た。

1. 教育に関しては，救急研修に参加している群が，していない群に比べて直観能力が有意に高かった。
2. 看護実践の主体性の直観能力に関しては，「看護の振り返り」「経験談の傾聴」「経験の活用」ともに，実践している者の群が有意に高かった。加えて，「看護の振り返り」については，すべての因子について直観能力の点数が有意に高かった。
3. 経験年数に関しては，経験年数を経るほど直観能力が高くなる傾向にある一方で，「巻き込まれ因子」は有意差はないものの経験年数の少ない看護師ほど得点が高かった。

以上の結果より，直観能力の育成には単純に経験年数を経るだけでなく，研修参加や看護実践へ主体的に取り組むこと，役割を通した学びなど意味ある経験を得ていくことで，直観的能力の成長がより一層高まるものと考えられる。

キーワード：直観，教育，看護実践の主体性，経験年数

はじめに

重篤な有害事象や院内の予期せぬ死亡は突然発生するのではなく，66～95%の症例では心停止の6～8時間前に急変の前兆（呼吸，循環，意識の異常・悪化のSOSサイン）があると言われている¹⁾。昨今，海外をはじめ日本でも，急変の兆候から心停止及び他の病態の悪化も未然に防ぐシステムとしてRapid Response System（以降RRSとする）の導入が推奨されている。A病院においても，2019年度からRRSを導入し，容態変化への早期対応体制に取り組んでいる。このRRS起動基準には，「患者に関する何らかの懸念」という項目が含まれ，バイタルサインや臨床所見には裏付けられない「何かへん」という看護師の直観的感觉を重要視している。看護師の直観的感觉に関する先行研究^{2)～4)}では，経験年数との相関関係が明らかにされている一方，直観的能力育成においては，入職後の幅広い適切な教育の必要性や，経験に価値や意味付けを行うプロセスの重要

性が指摘されている。また，直観的能力育成に個々の看護師が意味ある経験を意識的に努力し看護実践に活かすといった主体的な取り組みの必要性も示唆されている²⁾。

私たちはこれらの先行研究を踏まえ，看護師の直観的能力をさらに高めることにより，院内心停止の早期発見やその対応など質の高い看護実践に繋げることができると考えた。そこで今回，臨床看護師の直観育成に関する示唆を得ることを目的に看護師の直観と教育や看護実践の主体性，経験年数の関係を明らかにする。

対象および，方法

1. 研究デザイン：関係探索研究
2. 対象及び期間・場所
対 象：A病院勤務臨床看護師 468名
（臨床研修看護師，師長以上の管理職を除く）
期 間：2019年10月9日～2019年10月31日

場 所：A病院

3. データ収集方法

1) 測定用具には、川原ら⁴⁾が改良した「臨床看護婦の本質的直観能力(以降、直観能力尺度)」を使用した。6因子(「知力(6項目)」「臨床経験の豊かさ(5項目)」「論理的思考能力(4項目)」「巻き込まれ(4項目)」「感受性(4項目)」「一般教養(4項目)」)、27項目から成る自己評定尺度である。各項目は「非常に～である(5点)」から「まったく～でない(1点)」の5段階評価とし、高得点であるほどその能力が高い。

対象の概要は、年齢、経験年数、教育背景、救急部門(救命センター・ICU・ER)の経験の有無・役割(リーダー及び教育)の有無・救急研修参加経験の有無とした。看護実践の主体性は、先行研究²⁾を参考に「積極的に看護を振り返っている(以降「看護の振り返り」とする)」、「他者の看護実践の経験を聞く(以降「経験談の傾聴」とする)」、「他者の経験を自らの実践に活用する(以降「経験の活用」とする)」とし、「よくある(4点)」から「まったくない(1点)」の4段階評価とし、高得点であるほど看護実践を主体的に取り組んでいるとした。

2) 質問調査票の配布は、部署の看護師長を介して対象者に配布を依頼した。

3) 質問調査票は無記名とし、同封した封筒に入れ投函する留め置き法を用いた。

4. 分析方法

統計的分析は、IBM SPSS Statistics 26を用いた。教育や看護実践の主体性、経験年数が直観にどのように関係するのかを明らかにするために教育背景を短大・大学、専修・各種学校の2群に、看護実践の主体性は「よくある」「ときにある」と答えた肯定的な回答を「実践している」、「あまりない」「まったくない」と答えた否定的な回答を「実践していない」の2群に分け、直観能力全体と因子別の合計平均点数を求めt検定を用いて比較した。また、経験年数を3年未満、3年以上10年未満、10年以上の3群に分け、一元配置分散分析を行った。有意水準は0.05未満とした。

用語の定義

直観能力とは、不測の事態や急変時における微細で曖昧な情報の本質を瞬時に見極め、それらを関連付け全体像を瞬時に捉える能力⁵⁾とする。

結 果

468名に質問調査票を配布し、301名(回収率64.3%)から回答を得た。欠損のある回答を除いた276(有効回答率91.7%)を調査対象とした。

1. 対象者の概要

対象者の平均年齢は、37.4歳(±10.6)であり、臨床看護経験年数の平均は、15.2年(±10.7)であった。教育背景は専修・各種学校の卒業が161名(58.3%)、短大・大学の卒業が115名(41.7%)であった。救急部門経験がある者は172名(62.3%)、ない者が104名(37.6%)であった。リーダー業務や、臨床実習や看護師育成に伴う教育担当などの役割経験のある者が202名(73%)、ない者が74名(27%)であった。救急研修参加経験がある者が、200名(72.4%)、ない者が76名(27.5%)であった(表1)。

表1 対象者の概要

年齢	平均	37.4歳(±10.6)
経験年数	平均	15.2年(±10.7)
n = 276		
教育背景	短大・大学	115
	専修・各種学校	161
救急部門経験	あり	172
	なし	104
役割	あり	202
	なし	74
救急研修参加経験	あり	200
	なし	76
RRS養成経験	あり	42
	なし	234

2. 個人要因と本質的直観能力の比較

1) 教育と直観能力の比較

救急研修参加経験における直観能力は、救急研修参加経験なしの84.3 (±11.1) に比べ、救急研修参加経験ありが88.3 (±11.7) と有意に高かった (p=0.01)。

2) 看護の主体性と直観能力の比較

看護実践の主体性を問う「看護の振り返り」については、「看護の振り返り」を実践していない者 (82.6±11.8) に比べ、「看護の振り返り」を実践している者 (89.8±10.7) は、有意に高く (p=0.00)、すべての因子において有意差

があった (p=0.04-0.00)。「経験談の傾聴」については、「経験談の傾聴」を実践している者 (88.3±11.1) は、実践していない者 (79.2±12.5) に比べ有意に高い (p=0.00)。「経験の活用」についても、「経験の活用」を実践している者 (87.8±11.2) が、実践していない者 (76.2±13.2) に比べ高かった (p=0.00)。

3) 経験年数と直観能力の比較

経験年数における直観能力は、3年未満が78.0 (±9.5)、3年以上10年未満が83.1 (±8.6)、10年以上が90.1 (±12.2) で有意差があった (p=0.00)。

表2 「本質的直観能力」の総合得点及び各因子得点

	全対象 (n=276)
知力因子	19.4±3.5
経験因子	17.2±2.8
論理的思考因子	13.0±2.8
巻き込まれ因子	12.4±3.0
感受性因子	15.1±2.0
一般教養因子	10.1±3.2
尺度全体	87.2±11.6

表3 救急研修参加経験

	あり n=200	なし n=76	p値	
知力因子	19.7±3.5	18.8±3.4	0.07	
経験因子	17.5±2.7	16.6±2.8	0.01	**
論理的思考因子	13.2±2.9	12.2±2.6	0.01	**
巻き込まれ因子	12.5±3.0	12.2±2.9	0.35	
感受性因子	15.1±2.1	14.8±1.8	0.24	
一般教養因子	10.3±3.3	9.8±2.9	0.26	
尺度全体	88.3±11.7	84.3±11.1	0.01	**
t検定			*p<.05 **p<.01 ***p<.00	

表4 看護の振り返り

	実践している n=176	実践していない n=100	p値	
知力因子	20.0±3.3	18.3±3.7	0.00	***
経験因子	17.5±2.7	16.8±2.8	0.04	*
論理的思考因子	13.5±2.6	12.1±3.0	0.00	***
巻き込まれ因子	12.8±2.9	11.9±3.0	0.02	*
感受性因子	15.4±1.9	14.5±2.1	0.00	***
一般教養因子	10.7±3.3	9.1±2.7	0.00	***
尺度全体	89.8±10.7	82.6±11.8	0.00	***
t検定			*p<.05 **p<.01 ***p<.00	

表5 経験談の傾聴

	実践している n=243	実践していない n=33	p値	
知力因子	19.6±3.4	17.9±4.0	0.07	
経験因子	17.4±2.7	16.4±3.4	0.06	
論理的思考因子	13.1±2.8	11.9±2.9	0.03	*
巻き込まれ因子	12.7±2.9	10.8±2.8	0.00	***
感受性因子	15.2±1.9	13.8±2.4	0.00	***
一般教養因子	10.4±3.2	8.4±2.5	0.00	***
尺度全体	88.3±11.1	79.2±12.5	0.00	***
t検定		*p<.05 **p<.01 ***p<.00		

表6 経験の活用

	実践している n=261	実践していない n=15	p値	
知力因子	19.5±3.5	17.7±3.9	0.06	
経験因子	17.3±2.7	15.7±3.0	0.02	*
論理的思考因子	13.5±2.8	11.3±2.6	0.02	*
巻き込まれ因子	12.6±2.9	9.6±3.0	0.00	***
感受性因子	15.2±1.9	13.0±2.7	0.01	**
一般教養因子	10.2±3.2	8.9±3.1	0.11	
尺度全体	87.8±11.2	76.2±13.2	0.00	***
t検定		*p<.05 **p<.01 ***p<.00		

表7 経験年数別

	n=276			p値	
	3年未満 n=21	3-10年未満 n=83	10年以上 n=172		
知力因子	17±9.5	18.3±3.1	20.3±9.5	0.00	***
経験因子	15.1±2.3	16.1±2.3	18.1±2.6	0.00	***
論理的思考因子	12.1±2.9	12.5±2.8	13.3±2.8	0.39	*
巻き込まれ因子	12.7±2.3	12.5±3.1	12.4±2.9	0.86	
感受性因子	14.7±2.2	15.0±1.8	15.2±2.1	0.49	
一般教養因子	8.3±2.8	8.8±2.7	10.1±3.2	0.00	***
尺度全体	80.0±9.5	83.1±8.6	90.1±12.2	0.00	***
t検定		*p<.05 **p<.01 ***p<.00			

考 察

本研究における直観能力は、先行研究²⁾の一般病院の尺度全体の合計平均78.7(±11.5)に比べ、87.2(±11.6)と高い結果を示した。藤谷らはRRSで必要な4つの構成要素の第1に「気づき」を掲げており、これは本研究における直観能力と同様の意味合いを持つ。この能力を向上させるための指導手段としてシミュレーショントレーニングを挙げている⁶⁾。A病院は、高度救命救急センターを標榜して

おり、救急医や救急認定看護師、急性重症患者看護専門看護師を中心に様々な救急に関する研修会を開催している。このような地域における役割の認識や研修会参加が今回の結果を表したのではないかと考える。これは、救急研修参加経験で、参加している群と、していない群を比較すると、参加している群が直観能力の点数が有意に高かったことから裏付けられる。先行研究⁷⁾によると、「研修参加を通じた学習」が最も看護実践能力の向上に寄与することが明らかにされている。また、大学病院の院内救急

体制を明らかにした河井ら⁸⁾は、研究対象施設におけるRRS要請に携わった職員の約半数は看護職であり、教育コース受講者であったことを明らかにしている。Tschannenらによると、看護実践能力の発達には学習する機会と学習したことを実践し評価する機会が肝要である⁹⁾と述べている。既存の救急研修の多くは、座学に加えて体験的実習が組み込まれているものも多く、学習した内容をその場で実践的に体験し、その後、自己や他者も交えて振り返り意見交換が行われることもある。さらに、研修参加を通して日頃の看護実践を振り返り、自己の経験と照らし合わせることで、経験を個別的に分析解釈し、より理解を深める機会となるといえる。このように研修参加を繰り返すことによって、観察し見えないものを感覚的に捉え、状況をアセスメントする能力が向上し、急変の前兆にある患者の把握率も高まるものと考えられる。以上のことより、救急研修参加することは、救急看護に関する知識や技術の習得に繋がり、ひいては直観能力向上につながるということが推測される。

看護実践の主体性を問う「看護の振り返り」「経験談の傾聴」「経験の活用」の3項目においては、いずれも実践している者の群が直観能力の得点が有意に高かった。特に、「看護の振り返り」については、すべての因子において得点が有意に高かった。Kolbが提唱する経験学習理論では、人は自身で経験し、それに対して振り返り、そこから様々な気づきをすることで、そこから学び得た内容を次の実践に活かすことができる¹⁰⁾と述べている。また、Schonは出来事の後はその行為を吟味することによって直観が働き、新しい知識が生じ、個人に統合される¹¹⁾としている。よって看護師は、日頃の看護実践の中で印象に残った困難な経験や、「何かおかしい」「何かへんだ」と感じた違和感や疑問を振り返り探求していく機会が重要と考える。また、本研究の対象者の経験年数別の結果を参照すると、「巻き込まれ因子」を除く、すべての因子と総合得点において経験年数の長い看護師ほど直観の得点が高くなる傾向があることがわかった。先行研究では、経験年数と直観に必ずしも関連がみられなかった¹²⁾としており、多くの年数を経験することより、質のよい経験をどれだけしたかという方が、察知する感覚を発達させる¹³⁾と述べられている。A病院では、救急研修の参加率が72.4%と半数以上を占めており、積極的に研修参加が

行われていることや、「なにか変だ」という経験に対し主体的に振り返りを行っているため、その経験の蓄積により経験年数が高いほど直観能力が高い結果となっているのではないかと考える。これらのことから、学び得た内容を次の看護実践に活かし、その結果を再び振り返り評価するプロセスの繰り返しが、直観をはぐくむのではないかと考えられる。

一方で、「仕事を離れても患者の状態が気になる」、「患者への一体感や死に対し強い喪失感情を抱く」といった項目を含む「巻き込まれ因子」は、有意差はないものの経験年数の少ない看護師ほど得点が高くなる傾向が確認された。山田ら(2006)は、経験の少ない看護師は患者との対人関係の構築や状況把握のために、患者への感情移入が強くなり、患者の状況に引き込まれる傾向があると述べている。経験や学びを通し様々な患者との関わりを経るにつれしかるべき距離感を獲得していくと推察される。よって、経験年数が高くなるにつれ「巻き込まれ因子」における直観能力の点数が徐々に低下していくのではないかと考える。

以上のことから、直観能力の育成には単純に経験年数を経るだけでなく、研修参加や看護実践へ主体的に取り組むこと、役割を通した学びなど意味ある経験を得ていくことで、直観的能力の成長がより一層高まるものと考えられる。

結 論

本研究を通して以下の結論を得た。

- 1) 教育に関しては、救急研修に参加している群が、していない群に比べて直観能力が有意に高かった。
- 2) 看護実践の主体性の直観能力に関しては、「看護の振り返り」「経験談の傾聴」「経験の活用」ともに、実践している者の群が有意に高かった。加えて、「看護の振り返り」については、すべての因子について点数が有意に高かった。
- 3) 経験年数に関しては、経験年数を経るほど直観能力が高くなる傾向にある一方で、「巻き込まれ因子」について有意差はないものの経験年数の少ない看護師ほど得点が高かった。

おわりに

今回の調査は、対象をA病院の看護師に限定した関連検証であり、研究の対象が小規模のため、結果を断定的に言うことはできない。また、調査対象者の職位や職場環境の違いなど、今回調査していない基本属性に対してもさらなる検証を深めていく必要がある。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反なし。

文 献

- 1) Van Voorhis KT, Willis TS : Implementing a pediatric rapid response system to improve quality and patient safety. *Pediatr Clin North Am* 2009 ; 56 : 919-33
- 2) 山田理絵, 泉キヨ子, 平松知子, 他 : 臨床看護師の直観と病院, 経験年数, 職種との関連性の検討. *日看管理会誌* 2007 ; 10 : 40-7
- 3) 竹川敏美, 内上ミワ子, 塚原千恵子, 他 : 当院看護婦の直観能力と臨床経験との関係. *日看会論集 : 看管理* 1999 ; 29 : 9-11
- 4) 川原由佳里, 佐々木幾美, 荻野雅, 他 : 看護専門職の本質的直観能力に関する実態調査. *日本保健医療行動科学会年報* 1996 ; 11 : 162-77
- 5) 山田理絵 : 看護師の直観に基づく意思決定に関する文献レビュー. *日看研会誌* 2018 ; 41 : 1021-32
- 6) 藤谷茂樹, 下澤信彦 : 院内急変対応システム (RRS) の概論. *聖マリアンナ医大誌* 2017 ; 45 : 85-93
- 7) 上村千鶴, 高瀬美由紀, 川本美津子 : 看護師による学習行動と看護実践能力との関連性. *日職災医学会誌* 2016 ; 64 : 88-92
- 8) 河井健太郎, 太田祥一, 内田康太郎, 他 : 大学病院における院内救急体制と救急専従医の役割の検証. *日救急医学会誌* 2011 ; 22 : 165-73
- 9) Tschannen D, Aebbersold M, Sauter C, et al : Improving nurses' perceptions of competency in diabetes self-management education through the use of simulation and problem-based learning. *J Contin Educ Nurs* 2013 ; 44 : 257-63
- 10) Peter Jarvis, John Holford, Colin Griffin : 「The Theory & Practice of Learning」 2nd ed, London : Routledge 2003 : p53-67
- 11) Donald A. Schön : 「The reflective practitioner」 1984, 佐藤学, 秋田喜代美訳 「専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える」, 東京 : ゆみる出版 2001 ; p76-121
- 12) 渡辺かづみ : 臨床看護婦が「何か変」と察知することの意味. *看護* 2002 ; 54 : 100-4
- 13) 杉本厚子, 堀越政孝, 高橋真紀子, 他 : 異常を察知した看護師の臨床判断の分析. *Kitakanto Med J* 2005 ; 55 : 123-31

The Relationships between Clinical Nurses' Intuition, Education, Independent Nursing Practice, and Years of Experience

Atsuko SUZUKI, Sachi SHIRAKI, Shoko NAKANO, Hiwa SHINOHARA, Hiromi FUKUTA

6th floor, South Ward of Tokushima Red Cross Hospital

The aim of this study is to investigate the relationships between clinical nurses' intuition, education, independent nursing practice, and years of experience. We conducted a survey with 468 clinical nurses at Hospital A using a questionnaire based on the scale modified by Kawahara in order to obtain insights into the development of intuition among clinical nurses.

The findings were as follows: With regard to education, the group that participated in emergency training had significantly higher intuition than did the group that did not participate. With regard to independent intuition in nursing practice, the group of nurses that engaged in reflection, actively listened to stories of experience, and utilized their experiences had significantly higher intuition than those that did not engage in these activities. Moreover, the intuition of nurses who practiced reflection was found to be significantly high for all factors. Additionally, nurses' intuition tended to increase with increasing years of experience. However, with regard to the involvement factor, there was no significant difference, although the intuition score was higher for nurses with fewer years of experience.

These results suggest that intuition develops not only by accumulating years of experience, but also by gaining meaningful experiences such as training, active participation in nursing practice, and learning by serving in different roles.

Key words: intuition, education, clinical nursing practice, nursing experience

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 26 : 37-43, 2021
